

「おたから」を継承する意識を持つ

変化の激しい現代の世の中で、全てのおたから（文化遺産）を守り続けることは容易なことではありません。しかし、それを自然に任せて無意識のうちに失っていくことと、意識を持って「これは私たちの地域の大切なたからなのだ」「できるだけ守り伝えていこう」「保存が難しければ、せめてきちんと記録していこう」と継承の努力をしていくこととでは、大きな違いがあります。

現代の暮らしの中でいかす（生かす・活かす）

おたから（文化遺産）は、決して、凍結的に保存することだけが継承の手段ではありません。積極的に紹介され、活用され、あるときは新しくつくられるもののモチーフになり、現代の人々の暮らしの中でいかされていくことこそ、最大の継承の手段であると考えます。

おたからをお互いに認め合う

本事業では、文化遺産の調査・記録作成事業、認定事業、データベースの作成、普及啓発・育成事業などを中心とした事業を行っていきます。調査では、地元の人たちが地元を改めて歩いて、地域で大事にされてきたもの・大事にしていきたいものを再発見・再確認し、写真や位置情報、説明などを記録することで、おたからの拾い上げを行っていきます。認定というのは、市民や地域の人々同士が「これはこの地域にとってこういう意味で大切なものなのだから、萩のおたからですね。」と互いに見せ合って認め合うステップです。

まずは何が地域のおたからなのかを知る

本事業の最終的な目標は、地域のおたからや隠れた魅力を地域の資源・財産として、まちづくりや観光にいかしていくことです。愛着をもって大事にしながらも現代の感性で使いこなしていくためには、まずは何が地域のおたからなのか、それはどこにあるのか、そこにはどんなストーリーがあるのかを萩市民全員が知ることで始まります。

その基礎資料やしぐみをつくるのがこの事業です。

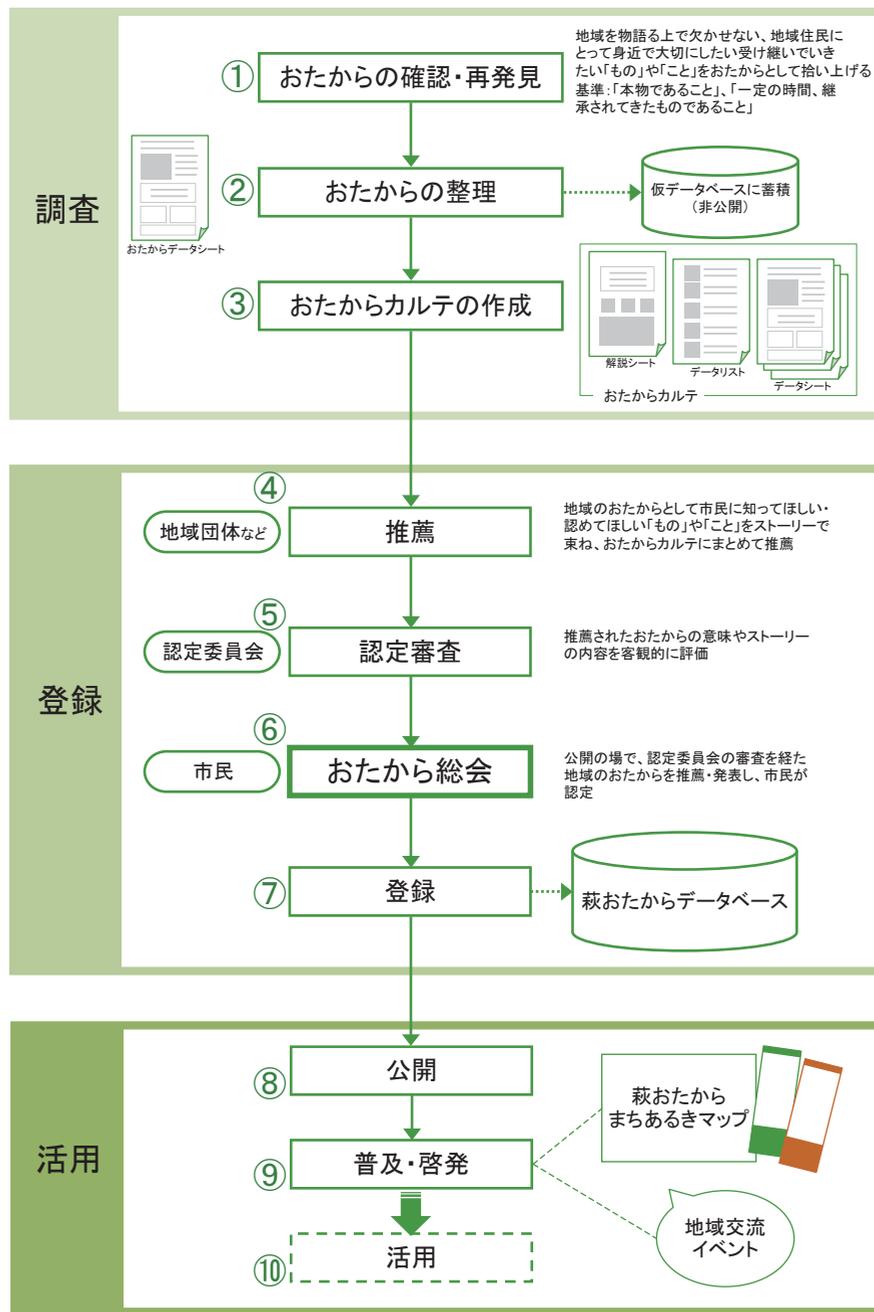
おたからの登録基準

「本物であること」

「一定の時間、継承されてきたものであること」

「本物であること」とは、レプリカ（複製品）であったり、価値の根拠や履歴等があやふやではなく、真正性（オーセンティシティ）が説明できることです。

「一定の時間継承されてきたものである」とは、個人の次元を超えて価値が共有され、大切に継承されてきたもの（おおむね2世代・50年以上がめやす）です。



萩のおたから

萩まちじゅう博物館文化遺産活用事業では、地域のおたからを再発見して、「萩のおたから」として地域から推薦し、市民が互いに認め合い、データベースで公開して活用する取り組みを行っています。これからも、萩のおたからを未来に引き継ぐため、萩市民が協力しあい、守り育て、いかす活動を進めていきます。

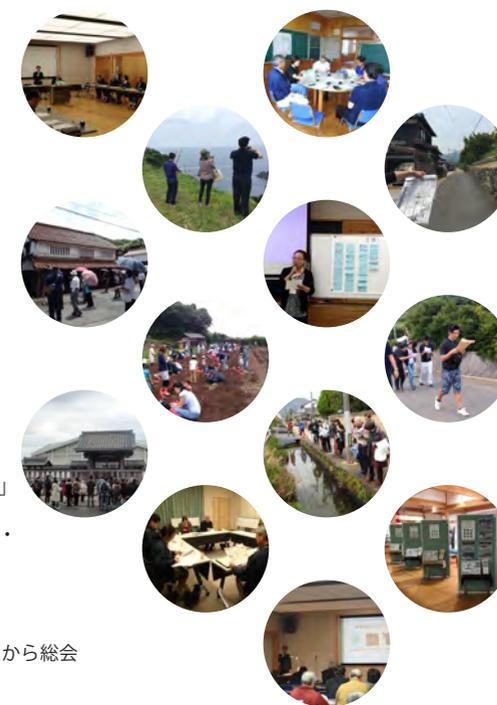
萩のおたから（文化遺産）とは…

- ・地域らしさを作り出している「もの」や「こと」
- ・地域のことを物語る上で欠かせない「もの」や「こと」
- ・地域のたからとして大切に守り伝えていきたいと思う「もの」や「こと」

平成 29 年（2017）度の活動

- | | | |
|------|--------|---|
| 2017 | 4月14日 | 第6回実行委員会 |
| | 5月～ | 各地（江向、相島、浜崎）で
現地調査・資料調査
地域おたからマップ原稿作成
地域交流イベント企画・準備 |
| | 7月18日 | 地域おたからワークショップ
「まち博ツアーをはじめよう3」
講師：長崎コンブラドルル 川良 万理氏
佐々並建地区でツアー体験、
「長崎さぐるまち歩きヒント」を学び、
各地のプラン発表、アドバイスを受けた。 |
| | 9月23日 | 相島地区 地域交流イベント（共催）
「相島いも掘りフェスタ」 |
| | 11月26日 | 江向地区 地域交流イベント
「水とともに暮らした城下町の
秘密を探ろう！」 |

- | | | |
|------|-------|--|
| 2018 | 12～1月 | 各地で推薦するおたからの検討・
推薦資料作成 |
| | 2月8日 | 文化遺産認定委員会 |
| | 2月16日 | 第5回 萩まちじゅう博物館おたから総会
各地域からおたからを推薦発表、
市民が「萩のおたから」として認定 |



水とともに暮らしてきた

城下町・萩の教育と近代化の歴史

萩城下町が形成された三角州の中心部から南に位置する江向は、海拔が低く湿地が多いため、江戸時代、北は水田・蓮田が遊水池として活用され、南は中下級の武家地となっていました。橋本川と松本川に挟まれた城下町は水害が多く、新堀川や藍場川(大溝)を開削して水はけをよくするとともに、水運や生活用水などにも利用してきました。

標高の高い三角州北側の地(砂丘)に武家屋敷や町家・寺町が造られた一方、三角州中央の広大な低湿地(後背湿地)には藩校明倫館が移転され、藩の教育の中心として機能しました。明治以降は低湿地に学校や公共施設などが集中することで近代化の波が吸収され、結果的に城下町の姿を保存することにもつながりました。

現在、穏やかな住宅地を形成する地区内には、松下村塾の門下生で日本の造船業の近代化に努めた渡辺高蔵の晩年の旧宅や、日本画家としてフランスのオール・ヌーヴォーに影響を与え、長門峡をはじめとする山口県内の景勝地の保護や整備に尽力した高島北海の旧宅跡も伝えられています。

水とともに暮らしてきた萩城下の景観や遺構、教育の普及と近代科学の発展に尽くした人々やその遺跡が江向地区のおたからです。

おたからの一例



旧萩藩校明倫館, 旧明倫小学校校舎



調整池でもあった水練池



明倫館周囲の「水抜き」の痕跡



萩のへそ・萩城下街割原標石



武家屋敷を起源とする建物



渡辺高蔵旧宅



南園のクロマツ



藍場川と藍玉座跡



水はけを保つための側溝清掃

日常とは違った、心豊かになる

ハートの形の島・相島

相島は、阿武火山群の火山のひとつで、約7万年前に陸上で噴火した溶岩台地です。後に海面が上昇し、テーブルのような形が特徴的な日本海に浮かぶ島となりました。島の周囲には、自然が造り出した断がいや奇岩も多く見られます。

相島に人が移り住んだのは、平安時代の終わり頃(1100年終わり)といわれています。また、室町時代の1500年初めの記録には、すでに「優島」という地名が見られ、この頃から「アイシマ」と呼ばれていたようです。

島の内側に整然と積まれた石垣は、耕地や宅地を増やすために長い年月をかけ島民の「手」で築いたもので、島内各所に人の「手」が見える風情ある工作物を見ることが出来ます。畑を大事にし農業が盛んな相島では、スイカ、葉タバコ、サツマイモなどを丹精こめて栽培しています。漁業では、浅海漁が盛んでサザエ・アワビなどが多く水揚げされます。

日常とは違った、心豊かになるハートの形の島・相島が相島地区のおたからです。

おたからの一例



相島の溶岩台地



島の周囲に広がる「相島八景」



奇岩・通ヶ鼻、ライオン岩



相島漁港、港まつり



石積みの段々畑



トノスを背負った島民と石垣道



台地の上の畑の風景



相島のスイカ



相島のさつまいも

2013

- ◆ 浜崎地区のおたから 港で栄えた商家町
- ◆ 旧松本村地区のおたから 松陰先生のふるさと、旧松本村
- ◆ むつみ地域のおたから 恵まれた自然地形と先人から引き継がれてきた田園風景、暮らしの証
- ◆ 旭地域明木地区のおたから 街道による人・物の交流と思いやりの中で生まれ栄えた明木のおたから
- ◆ 旭地域佐々地区のおたから 萩往還の宿場町を中心に栄えた心のよりどころ、佐々並

2014

- ◆ 堀内・平安古・城下町地区のおたから 維新の志士が往来した当時の風景を今も残すまち
- ◆ 土原地区のおたから 松本川に育まれた人々と武家の町割り
- ◆ 川上地域のおたから 阿武川とともに生きた山里の歴史と営み
- ◆ 福栄地域のおたから 深い山々にいざなわれた信仰の里
- ◆ 三見地区のおたから 赤間関街道の宿駅町として発達した三見市と街道の変遷

2015

- ◆ 川島・藍場川地区のおたから 人々の暮らしにとけこんだ藍場川と川島の風景と歴史
- ◆ 笠山・越ヶ浜地区のおたから 越ヶ浜の自然と漁業集落の暮らしの文化
- ◆ 須佐地域のおたから 幕末・明治維新と日本の近代化を支えた須佐
- ◆ 田万川地域のおたから 田万川のおたからを育んだ海彦・里彦・山彦
- ◆ 大井地区のおたから 古代の息吹が今にいきづく阿牟の里・大井

2016

- ◆ 椿地区のおたから 萩の玄関口・椿
- ◆ 大島地区のおたから 恵みの海と火山台地のヤマに育まれた元気な島

これまでに認定されたおたからの詳細を記した「おたからカルテ」は、萩のおたからデータベースでご覧いただけます。

URL: <https://sites.google.com/site/otakarakarute/>

